

ミニトマトのセル成型苗を直接定植するときの苗齢

大野和宏 · 白木己歳 · 串間秀敏 (宮崎県総合農業試験場)

Kazuhiro ONO, Mitoshi SHIRAKI and Hidetoshi KUSHIMA :
Transplant age of plug-raised cherry tomato seedling

ミニトマトのセル成型苗が、JA や育苗業者から農家に供給される動きが進んでいる。セル成型苗を受け取った側は、これを二次育苗して従来の大きさの苗にして定植する方法と、直接定植する方法とがある。本報では、直接定植する栽培における、定植時の苗齢がその後の生育や収量等に及ぼす影響を検討した結果を述べる。

1. 材料および方法

試験区は、72 角穴セルトレイで育苗した苗を使い、第 1 表以下に示すように、接ぎ木後 15 日苗区から 30 日苗区まで設けた。供試したトマト品種は、穂木が「ミニキャロル」、台木は「影武者」。播種は 9 月 2 日で、接ぎ木は 9 月 18 日。接ぎ木方法は胚軸部を合わせるチューブ接ぎで、台木は断根した。したがって、区名の接ぎ木後日数はセル育苗期間にあたる。

栽植密度は a 当たり 185 株植え。施肥は、各区共通に基肥として a 当たり堆肥 200kg、苦土石灰 12kg、N、P₂O₅、K₂O 各 1.5kg を施肥した。追肥は、N2.0kg、P₂O₅0.9kg、K₂O1.7kg を 7 回に分施した。収穫期間は 5 月下旬までとした。

2. 結果および考察

苗の生育：接ぎ木後 20 日までは良好な草姿を示したが、それ以上の苗齢になると、草丈の割には葉が小さく、充実さに欠ける草姿を示した。根鉢の状態は、接ぎ木後 15 日の苗では、定植の際、一部根鉢の崩れるものがあった。接ぎ木後 20 日以降の苗は、根鉢の形成は良好であった。

定植後の生育：緑熟期頃までの初期生育は、接ぎ木後 20 日苗区が最も順調であった。これに対し、接ぎ木後 15 日苗区は徒長気味の生育を示し、そのままでは過繁茂が心配された。接ぎ木後 25 日苗区と接ぎ木後 30 日苗区は、莖葉が小柄にすぎる状態で推移した。収穫期に入ってから各区の生育は、接ぎ木後 20 日苗区が引き続き順調に経過した。これに対し、接ぎ木後 15 日苗区は、1 月下旬頃から葉色が抜けて肥料切れの様相を呈し、追肥を行っても十分回復しないままの状態に推移した。一方、接ぎ木後 25 日苗区と接ぎ木後 30 日苗区は、3 月以降、次第に生育が旺盛になる動きが認められた。

収量と品質：総収量・上物収量とも接ぎ木後 20 日苗区が最も多かった。裂果の発生は、各区とも 3 月をピークとする動きを示した。区による発生の違いはこのピークまでの動きにみられ、若い苗を定植した場合ほど発生率が高い傾向があった。3 月以降は、各区とも同様に漸減した。

各区の上物収量の時期別の動きを、最も多収であった

接ぎ木後 20 日苗区と比べると、接ぎ木後 15 日苗区の場合、1 月までの初期収量は多かったが、それ以降の収量が少なかった。接ぎ木後 25 日苗区と接ぎ木後 30 日苗区は、2 月以降の収量はほぼ同等であったが、1 月までの初期収量が少なかった。

以上の結果、ミニトマトの促成栽培で、断根接ぎ木した 72 角穴セル成型苗を直接定植する場合の苗齢は、接ぎ木後 20 日がよいと考えた。

第 1 表 定植時の苗の状態

試験区	草丈 (cm)	葉数	最大葉		直径 (mm)	根鉢 形成率 (%)
			長 (cm)	幅 (cm)		
接ぎ木後15日苗区	10.9	4.3	8.1	5.9	3.2	75
接ぎ木後20日苗区	16.5	5.3	12.0	7.8	3.7	100
接ぎ木後25日苗区	21.9	5.5	12.0	8.4	3.9	100
接ぎ木後30日苗区	29.4	7.4	13.9	9.0	4.1	100

注) 根鉢形成率は、セルトレイから取り出した時に根鉢が崩れなかった苗の割合

第 2 表 収量および品質 (a 当たり)

試験区	総収量			上物収量		
	個数	重量 (kg)	比	上物率 (%)	重量 (kg)	比
接ぎ木後15日苗区	131,630	1,505	96	85	1,277	91
接ぎ木後20日苗区	135,185	1,560	100	90	1,403	100
接ぎ木後25日苗区	129,778	1,494	96	88	1,309	93
接ぎ木後30日苗区	123,509	1,404	90	89	1,250	89